

「ハレとケ」 通信

第12号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築 (12)

「旧善通寺偕行社附属棟」

「なぜ、旧善通寺偕行社は残ったのか。」

旧善通寺偕行社整備検討委員会 副委員長

旧善通寺偕行社施設整備監修委員会 委員長

多田善昭氏 (多田善昭建築設計事務所 主宰) のお話から

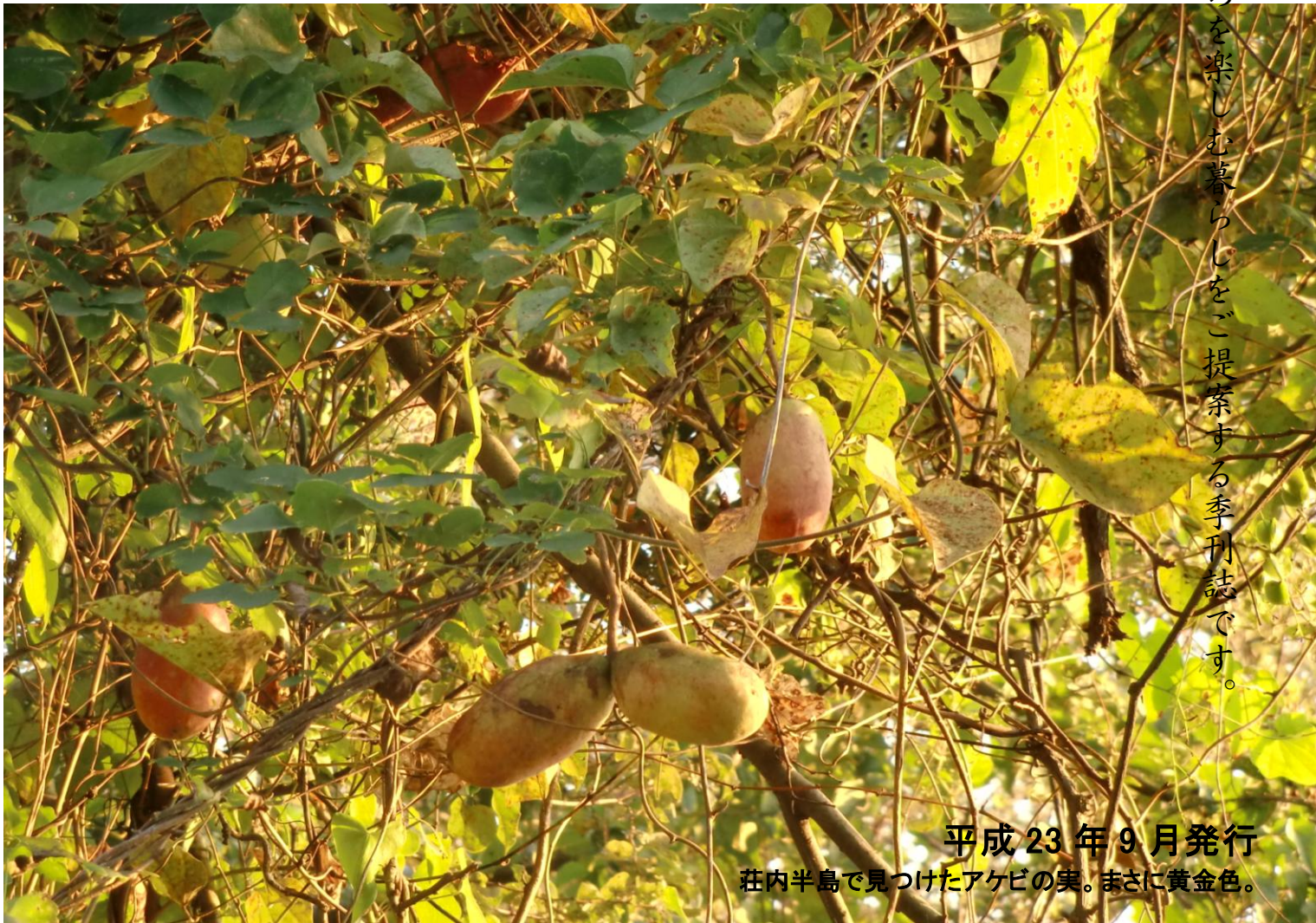
「ハレとケ」のある暮らしかた

【七五三／すこやかな成長を祈って】

中津万象園「花の歳時記」(12)

サルスベリ

かさねの色 (12) 「移菊」



平成23年9月発行
庄内半島で見つけたアケビの実。まさに黄金色。

物語のある建築 (12)

平成十九年度 基本設計／堀江建築工学研究所・実施設計／大建設

「旧善通寺偕行社附属棟 新築工事」

今回の物語に登場するのは、『旧善通寺偕行社附属棟』の施工を担当した、弊社社員のみならず、

工務部統括課長の松坂伸基、建築課の西尾孝弘、施工図担当の田嶋比呂美です。

三人の話を聞いていてひしひしと伝わってきたのは、建物をつくることの楽しさ、そして、喜び。

まさに、「建設業に携わる幸せをおすす分け」というテーマにぴったりの、今回の「物語のある建築」です。



↑ 国指定の重要文化財である「善通寺偕行社」を地域の宝として根付かせるため、利活用のためのスペースとして新に設計された「附属棟」。「100年後には文化財となる建物を！」を合言葉に、100年後になっても美しい建物、100年後の住民にも愛され、誇れる建物を目指して建てられた。(撮影：浅川敏氏)



↑ 松坂伸基(1級施工管理技士)



↑ 西尾孝弘(2級施工管理技士)

— では、まず最初に…。

三人は、一緒に仕事をするのは、このときが初めて？

西尾「初めてでしたね。これ以降は一緒にやるのが多くなりましたけれど。」

— 三人の役割分担は…、松坂課長が責任者で、西尾さんが実際に現場を管理して、田嶋さんが施工図と事務、でいいのかな。この時、松坂課長は入社して何年目でしたっけ？西尾さんは？

松坂「私が21年目。」

西尾「私が8年目です。」

— もつそんなになるんですね。この3人の組み合わせは、どんな感じでしたか？

松坂「私は血液型がA型なんやけど、その

わりにいい加減で。でも、西尾くんも田嶋さんも、二人ともキッチリしとるから助かりました。」

田嶋「ええつ、松坂さんの方がキッチリしてますよね。」

— ちなみに、他の二人は何型？

西尾「A型です。」

田嶋「A型です。」

— それは、なんだかものすくキッチリしてそうな現場だなあ。『細かさ』の感覚が一緒なんでしょうか？

松坂「田嶋さんも西尾くんも、現場はきれいなのが好きなんです。とにかくあの現場はきれいだったと思いますよ。」

西尾「うん、たしかに、あの現場はゴミ一つ落ちてないし、足場の手摺り一本抜けてなかったと思います。」

田嶋「朝来たら、松坂さんがせつせと掃いてた、ってこともありましたよね。」

松坂「別の現場だったら、誰か他社の人や関係者の人を現場に連れてくるときに、『〇日に行くからな』って予告が必要あったり



↑ 田嶋比呂美(2級建築士)

するじゃないですか、掃除をさせておくために。でも、あの現場はとにかくいつも綺麗だったから、いっしょに人が来てても恥ずかしくなかったし、そのことは設計事務所や市の関係者の人も言っていましたね。『いや、やっぱり、いつ連れてきててもエエやろっつて。』

— すこい(笑)。他にお互いの印象はどうでした？

西尾「松坂さんは、先の先の先まで見越すような指示を出すんですよ。だけど、そこまで読んで言っている、ということを出さない。なので、最初は『何を言ってるんかな？』と思うこともあったけれど、その先の先の先まで状況が動いてくると、『あ、このためだったのか』と分かる。そこはすこいですね。」

田嶋「二人とも相手のことを気遣ってくれて、すごく人柄の良い人たちで、一緒に仕事をしていたとしても楽しかった。私は、二人に付いて行けば良かった感じで。」

— なるほど。そこで、その田嶋さんやけど、「彼女の施工図を描く能力はスゴイ」って、他の人からも褒められたことがあるんですね。今回の現場も、施工図を色分けしたり、とても賢い図を描いたと聞いていますが。

田嶋「いや、それは誤解で、その色付けす

るとかそういうのは、松坂さんに教えてもらったアイディアなんです。」

松坂「今回の現場は、タイルやカーペット、石など、使う仕上げ材の寸法に併せて、壁の厚さや手摺りなどの位置を調整したんですよ。それで…」

— え、ちょっと待って、どういうこと？先に建物の寸法が決まっています、そこに仕上げ材を割り付けていくんじゃないの？

松坂「そうやけど、そのままだと、たとえばタイル貼りのところが、最後0.5枚分ハンパになったとか、そういうのが出るでしょ。一枚の石の真ん中に手摺りの棒が来るとか、それでは綺麗じゃないやないですか。だから、いちばん最初に仕上げ材をどう割付けるかを全部考えて、それから建設にかかっていたと思うですよ。」

— たしかに、聞くだけです。そっちなあ。…じゃあ、そういう施工上のことで、今回面白かったことを聞いていきましょうか。最初に図面を見て、「これはいつもと違うな」って感じたこと、覚えてますか？

西尾「最初に違ってたのは、建設予定地に、松や楓や40〜50本の木があつて、それをまず余所へ植え替えてから工事からなければいけなかったこと。その木はまた後で戻す予定だったので、『大丈夫か



↑ 植栽の移動。かなりの大木。

な」と緊張しました。結果的には、季節が植え替えには厳しい時やったにもかかわらず、ほぼ全部大丈夫だったですよ。それと、今回うちが施工したのは附属棟だったけど、隣の本体の建物は重要文化財やないですか、それには気を遣いましたね。」

— 他には？

西尾「構造体の鉄骨の柱に、木をかぶせていること。周りにもいっぱい木を使うから…っていうことで質感を合わせたみたいなんですけど。」

松坂「あれを見たときには、こんなことよく考えるな、と思ったなあ。」

— それってそんなに珍しいの？

西尾「構造体の柱が、鉄板と鉄板を十字に組んで溶接してあって、そもそもそんな柱自体が、普通はあり得ないんですよ。で、その柱のまわりに杉の柱を付けるんですけど、その鉄板が溶接することで、ものすこ

く歪みます。その歪みを直さないと杉の柱も付かないんですけど、それがまた大変で…」

— 造船会社で、歪みをとるために熱して水につけて…って言うのを繰り返してやるのをみたけど、あんな感じ？

西尾「そうです。」

— 施工精度が1mm…とかそういう話が出たのも、この柱の話でしたっけ？

西尾「あ、そうです。この柱の間にサッシが入るんですけど、柱がまっすぐに立っていないと、サッシとの間にチリ(隙間)が出てしまふ。これをまっすぐ立てるのが難しく、何回やってもこっちが真っ直ぐになつたら隣が引つ張られて傾いて…と、要求された施工精度をクリアするのは大変なつたですね。」

松坂「15本とかそのくらいの柱なんやけど、2日ばかりでやっとな。」

— あと、玄関付近の杉板の模様のコンクリートの打ちっ放しも難しかった、って聞いたけど。

西尾「ああ、あれは上手くできるかどうか実験しました。したことがなかったし。」

松坂「あれは夜な夜な、頑張った！」

— でも、県庁とか、古い建物でああいう仕上げって見たことある気がするよ。

西尾「昔の建物にはあったんですけど、私



↑十字柱の立てり検査

「私たちは、やったことがなかったわけじゃないですか。で、あの場合は、まず、田嶋さんが割付を考えて、型枠の上に造作大工が杉の板を組むわけです。その上にコンクリートを流すんですけど、綺麗に模様が出るかどうか不安だから、三種類くらい杉板に塗る材料を考えたんです。ええと、剥離剤と、洗剤、セメントペーストやっただかな。」

松坂「杉板と杉板の間に、1㎝くらいの目地を出さないといけないんだけど、それが潰れたらダメ、と指示もあつたし。」
 — 1mm?! 失敗したらどうなるん?」
 西尾「失敗したら…直します。」
 松坂「実際には、直すんは無理やなあ。」
 — 良かったなあ、綺麗に出来て(笑)。
 そつえば、見本とか色んなものを、途中

で行われた工事見学会で飾ってあつたよな記憶がある…。」

西尾「そうなんです。なんか、色々作りましたよ。松坂さんが、あれも作ってみよう、これも作ってみようって、見本とか実験とか。(笑)」

田嶋「確かに色々作っていたね。二人共業しそつやなうって思いながら見てました。」

— たとえば他に何を作つたん?

西尾「ええと、スロープ。軒天、柱、壁

コンクリート、タイル+換気口…」

— たくさん作つたねえ。どの現場でも見本って作るん?

西尾「いや、普通はそんなに作りません。でも、今回は、つくって見なきゃ分からないものが色々あつたので…。最初に作つたのは、たしかスロープかな。『滑らないか』と市の方も心配していたので、実際の傾斜

を作つてタイル張つて、そこに水を流して試してみたんです。」

松坂「綺麗に収めたい、っていう意識も高かつた現場だったんで…。だけど、そうやって事前に『この工法で大丈夫か』を丁寧に確認していったことで、設計事務所さんの信頼も得られたし、満足のいくものが出来たと思えますよ。」

— なるほど。

西尾「あと、杉板つて柔らかいんですよ。で、鉄筋組むときにコンクリートのかぶり

厚さ確保のためにスペーサーというのを使うんですけど、それを使うと、コンクリートに型がつくわけです。でも、それが見えたらダメなので、スペーサーは使わんとつてくれ、と『じゃあどうやったら鉄筋が組めるか』と考えて、杉板の上に養生シート

をかけて、そこにコンパネを敷いて鉄筋を

組んだんです。その鉄筋を今度は上から吊つて…」

— うんうん。それで、あとで一発芸のテ—ブルクロスみたいに養生シートとコンパネを抜くんやね?」

西尾「そつです。でも、思った以上に鉄筋とかが重くて、吊っているうちに、支点用に掛け渡した木が撓んできたんで、急遽照明取付用の穴を通して下から突き上げて、それでやつてきました。」

— 他に印象に残つたことは? 夜景の見学に行った時に、照明の作り出す陰がきれいだったことを覚えてるんだけど?」

松坂「照明…というよりは、ペンキかな。天井に照明を当てるので、その部分のペンキが汚いと困る。だから、塗装の段階から照明を当てて、『こころへん注意して塗つてよ』と。」



↑写真上より: 入口スラブの杉板へ、剥離剤を塗る。／杉板に塗る剥離剤の実験／入口スロープ傾斜確認の実験／建設中に行われた見学会の様子。色々な見本が並べられた。



↑写真上より:スプレーサーを使わずに施工するために鉄筋を吊る。/現場風景。象のマークが弊社の印。/本館とのつなぎ部分に使用するガラス搬入。/植栽の復旧工事。/猛暑の頃、現場職人さんのために「そうめん」をふるまう。

西尾「この照明は、電球色というか、柔らかい感じのLED照明を使っていて、特徴的だと思いますよね。」

— 横の建物とつなげる廊下があったけど、あのあたりは？

西尾「隣の本体の建物は文化財なので、釘やビスは使ったらダメなんです。だから、そのつなぎ目の部分の工事は気を遣いまし

たね。屋根もつないでいない訳やから雨が吹き込んだら漏るかもしれないと思っていただけ、結果的には大丈夫だったですね。」

松坂「あそこ、大きいガラスがあったやろ。」

西尾「図面を指さして」あ、ここですよ、これ。このガラス、ペアガラスなんで、220

kgくらいあるんですよ。普通だったら、クレーンで吊って取り付けるんですけど、

ここの場合、庇があつてそれができないんです。なので人力。この重さやつた

ら8人くらいはいるでしょ。吸盤付けてス

パイダーマンみたいに持つんですけど、片手しか使えないし。で、一枚のガラスに8

人くらいの男が取りついて運んでいく…」

— 周りから見たら、あんなにたくさんいるん？って感じなのかな。

田嶋「私、まさにそんな感じで見ました(笑)」

— じゃあ最後に。今回の仕事の出来が認められて、次のお仕事も「君たちが担当してくれるなら」って指名していただいたよね。それって、なんでやと思う？

田嶋「うちはみんなさそうですけど、真面目やし。それにやっぱり松坂さんと西尾さんのお人柄が…」

西尾「いやいや、田嶋さんの施工図の質の高さが…」

— (笑) 人柄が…ってなんか分かりにく

いなあ。どんな人柄？

田嶋「松坂さんと西尾さんは、相手の要望に応えよう、っていう誠実さをすごく持っていると思うんです。もちろん、技術や知識もすごいんですけど。それと、相手のことを考えて、先のこと、周りの状況を見ながら指示を出してくれる。この二人になら

安心してついていけるな…って思います。」

西尾「そういえば、松坂さん、現場に花植

えるんですよ。朝顔とか…。そういう、花を植えるような心があるのがええんじゃないですか。(笑)」

— あ、思い出した。なんか沢山プランターやベンチ、持って行ってたね

西尾「そうなんです。どうしても疲れがちな現場の

みんなの心をそうやって癒して…(笑)。あと、たとえば、松坂さんは夏場に職人さんのために素麺作ってくれたりするんです。

正直、暑い時期って、現場では何も食べる気がしないんです。でも、素麺なら食べられる。身体も冷やせる。そういうところが、すごいですよ。」

松坂「あれは好評やった(笑)」

— なるほど。ありがとっ、ございました!



(撮影:浅川敏氏)

【旧普通寺偕行社附属棟】への思い 〜施工担当者から〜

平成19年2月に附属棟増築工事の現場担当を任命され、工事の着手は3月からでした。

工程表を作成するにあたり、現地を見に行ったものの、そこには偕行社本工

素屋根が附属棟の建つ所にまでかけられ、また、松の木など高木が数え切れないほど植わっているという状態。

そのような状況だったので、到底すぐに工事にとりかかれるとは思えず、工事の完了時期が決まっていたことから、とても不安な気持ちになったのが最初の印象でした。それから弊社にて樹木の移植工事を1ヶ月ほどかけて行い、やがて偕行社本工の素屋根も無事解体されて工事に着手したのが6月からで、全体工程表を何度も書き直した記憶があります。

今回の工事は、偕行社の修復工事がメインであり、偕行社にはない水廻りの設備を附属棟に集約して、利用活用していく…ということでした。また、偕行社の防災設備工事、裏庭に防火水槽を設けて、屋外消火栓などの設備工事…と、同、仮囲いの中で、建設業者や設備業者など多数の業者が共にこの偕行社の復元工事に取り組みました。今振り返って工事中の事を思い返すと、定例会に普通寺市の教育委員会・建設課・整備検討委員会の先生方に同席して頂き、設計監理の大建設さんのもと、他の工事

とのすりあわせもできたことが、工事が円滑に進んだ要因かと思えます。そして、整備検討委員会の先生方からの推薦業者や職人さんたちのおかげで、細かい所まで気をつかって頂き、楽しく、いい仕事が出来たと思っています。

私の中で一番苦労したと言いましようか、竣工前に心配したのが、偕行社の周辺整備工事を施工したときに、偕行社の南側に最初の樹木を仮植していた場所で、庭の造成工事中、大雨が降った際に、その場所に雨水が溜まったまま地盤に抜けなかったのを見た時のこと。

その地盤下は粘土層ですぐには水が抜けず、池のようになってしまったのです。最終的に、その場所は、芝生を全面に敷き込む予定だったので「これでは植木はもとより芝を施工出来ない」と思い、考案したのが、重機にて粘土層を貫通して掘り起こしてその中に栗石と砂利を敷き込み、上から真砂土を敷き込むやり方。雨水がそこから地盤に浸透するだろうと考えました。しかし、一回目は失敗に終わり、2回目はさらに深く掘り起こし、数箇所を施工。

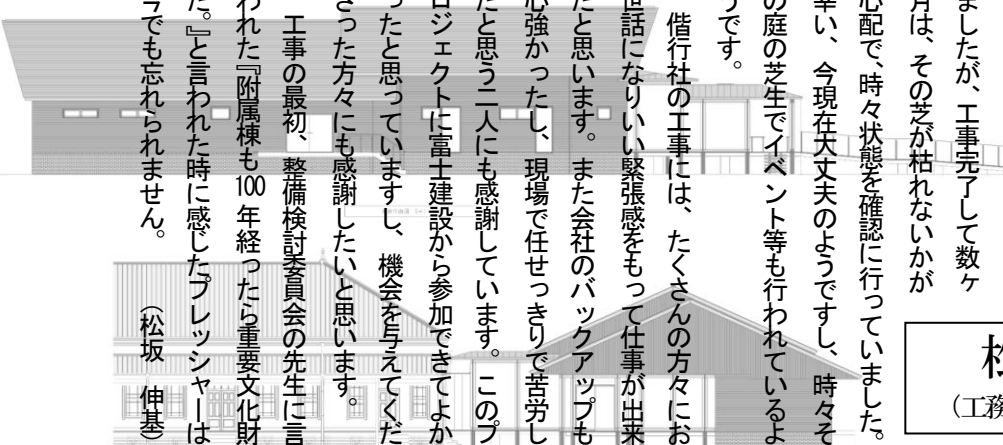
そして雨の後確認しますと、水たまりはできておらず、雨水は無事に地盤に浸透していました。

その後芝生を植え、無事工期も間に合って引渡が出来ましたが、工事が完了して数ヶ月は、その芝が枯れないかが心配で、時々状態を確認に行っていました。幸い、今現在大丈夫のようですし、時々その庭の芝生でイベント等も行われているようです。

偕行社の工事には、たくさんの方々にお世話になりいい緊張感をもって仕事が出来たと思います。また会社のバックアップも心強かったし、現場で任せっきりで苦労したと思う二人にも感謝しています。このプロジェクトに富士建設から参加できてよかったと思っていますし、機会を与えてくださった方々にも感謝したいと思います。工事の最初、整備検討委員会の先生に言われた『附属棟も100年経ったら重要文化財だ。』と言われた時に感じたプレッシャーは今でも忘れられません。

松坂 伸基
(工務部建築課 統括課長)

(松坂 伸基)



田嶋 比呂美

(工務部)

旧普通寺偕行社附属棟増築
工事の施工図を担当し、現場事
務所にて建物が出来ていく過
程を間近に見ることができ、と
ても良い経験をさせていただ
きました。

初めてこの現場の設計図を
見た時、『面白そうな建物だな
』と思うと同時に『私に施工図を書き上
げることが出来るのか?』と不安に感じた
ことを記憶しています。

工事期間はやはりいろいろ悩むこともあ
りましたが、竣工した建物を見ると、そん
なことも忘れてしまうような気がしました。
建物が出来ていく様子を、間近で見ること
ができるのは、(少し大げさかもしれませんが)
とても感動的です。以前友人に『形が
残るものを作る仕事をしているのがうらや
ましい』と、言われたことがあります。
そついった意味でも旧普通寺偕行社附属棟
は『百年後には文化財となる建物を』と
いうことで、私の中でも誇れる仕事となり
ました。

より正確な図面を書けるように、そして
自分自身誇れる仕事ができるように、これ
からも日々精進してまいりたいと思います。

(田嶋 比呂美)

(※この特集中の図面は全て田嶋の製図に
よります)

写真右より:

【西尾孝弘】 今年、社内恋愛で結婚したばかりの西尾さん。入社時(18歳)のまだ子どもらしい頃から知っているので、「ずいぶん男らしく、大人になったなあー」という気がします。また、結婚式で垣間見たお母さんと友だちを大事にする姿は、人間的にも信頼できる人だな、と確言させてくれました。一生懸命で明るくハキハキした彼ですが、同じ職場の奥さんとはどっちが強いのか...??(笑)

【松沢伸志】 お仕事が好きで、技術が好きで、会社にとってはまさに宝物のような存在です。やや無口な印象がありますが、「部下を育てる」ことには定評が。「現場は一つの会社のようなもの」という考え方も、さすがです。現場施工中には、折に触れて写真や報告をメールしてくれ、とても嬉しく頼もしく眺めていました。本社にいたときは、金魚にエサをやったり、朝顔の水をやったり...と嬉しそうに様々なものの面倒をみている、統括課長です。

【田嶋比呂美】 すごく「がんばりやさん」な田嶋さん。今、社内で施工図においては経験・知識共にトップクラスです。実は、彼女の家は花火やさん。夏の暑さの中、地元の花火大会でも大活躍しています。今回の原稿を依頼した際は、「図面が私の全てなので、何か一枚図面を載せてください」とのリクエストが。彼女のように、自分の技術に誇りを持ち、建物を造ることの感動を大切にしてくれている社員が沢山いるということは、弊社の強みではないかなと思っています。



「この工事は重要文化財である偕行社の文
化的価値を現在に残し、新しい形で利用し
ていく為に偕行社の建物に設けることの出
来ないハントリ、展示ロビー、トイレ、
倉庫などを備えた附属棟を建設する工事で
した。」

私たちが、この工事に着手する時には、
偕行社本体は他施工会社によって耐震工事
を終えて仕上げ材などを修復していく段階
でした。

同じ敷地内で偕行社の修復をする工事。
私たちの担当した附属棟を建設する工事。
他多数の工事が同時進行であった為「やり
にくいなー」「重要文化財のすぐ隣で工事
...」という不安がありました。

いざ工事にかかり苦労したのは今までに
やった事のない工法や、構造・仕上げ共に
高い精度を求められる仕事が多かったこと。
特にロビー上部に位置するコンクリートス
ラブの杉板打放し仕上げ(幅約3m、長さ約
12m)は経験がなく、また鉄骨

西尾 孝弘

(工務部建築課)

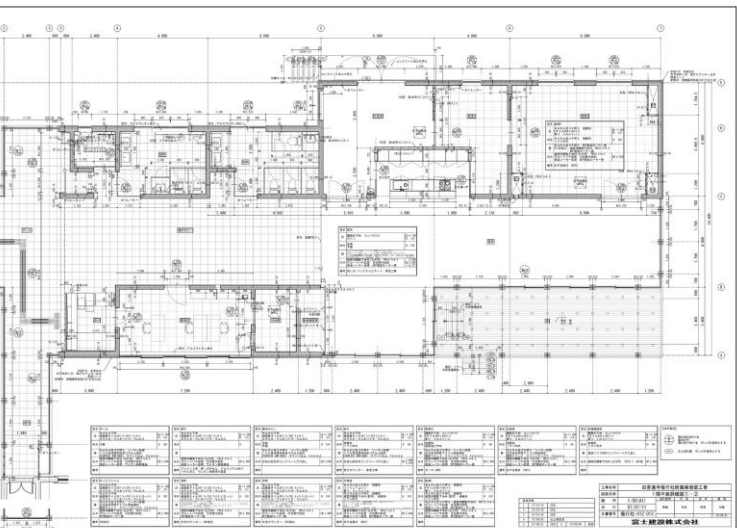
柱の建り精度については「木・
サッシ・ガラス・パネル・照明」
と、異種の取合いが多く精度を
出す必要がある、柱1本1本に
「建り精度1mm以内」という管
理値を決め、柱を建てていきま
した。非常に難しい作業ですが、

その時担当した職人さんの技量も高く最終
的に満足のいく物が出来ました。

振り返ってみると、自分にとって初めてで
勉強になる部分も数多く、大変だった分
思い出に残る現場となりました。そして重
要文化財である附属棟増築工事に携われた
ことは貴重な経験でした。

今現在偕行社は、さまざまなイベント(会
議・コンサート・結婚式)などを行うこと
ができ、また附属棟では日中カフェの営業
もしており、たくさんの方が集まる空間に
なっています。時々立寄る際、竣工から4
年経つ今でも、綺麗な状態であるのは凄く
嬉しく思います。

(西尾 孝弘)



なぜ、【旧善通寺偕行社】は残ったのか。

旧善通寺偕行社整備検討委員会 副委員長
旧善通寺偕行社施設整備監修委員会 委員長
多田善昭氏（多田善昭建築設計事務所 主宰）のお話から

善通寺には、現在でも旧陸軍第十一師団の施設群である、【師団司令部】【兵器庫】

【兵舎】【偕行社】の四つの建物が残っている。これらが移築されることもなく当時のまま残っているのは、日本でもここだけだと言っ。その所有者は善通寺市、防衛庁、学校法人と分かれているが、いずれも今も大切に維持管理され、使用されている。

しかし、どんなに素晴らしい建物でも、世の中から「必要だ」と認められなくなれば、荒れ、老朽化し、解体され姿を消してしまうのが当たり前のはずだ。では、なぜ、偕行社は残ったのか。

その背景には香川県の一人の設計者の姿があるように思う。善通寺に生まれ、丸亀市で設計事務所を主宰する多田善昭先生だ。通常、建築家（設計者）は、文化財に関わることで、自らの作品を生み出すことは、全く別の次元、異なる世界のものとして捉えることが多いのではないだろうか。だが、多田先生の場合は、それが渾然一体となっているように見える。その絶妙な距離感には

どこから来るのか？

不思議に思っていて尋ねてみると、「確かに、建築史家や文化財保護に携わる役職の人と比べれば、現役の、今も作品を生み出し続ける建築家がそうだったことに関わるのは珍しいかもしれない。でも、僕らが学生のころは、『自分が創ったものが将来文化財となるかどうか』という議論は、ごく普通になされていた。」という。『文化財』という存在を雲の上のものとして遙かに眺めるのではない、柔軟で自由な発想を、学生の頃からごく自然に身につけてきた、ということだろうか。

「文化財だから良い建物だ、というわけではない、良い建物だから必ず文化財になるというのでもない。建築主に長く使い続けてもらえる建物となるかどうか、つまり、『良いか悪いか』は、大事に使い続けてもらうに値する建物かどうかにかかっていると思う。」

『自分が創ったものが将来文化財となるかどうか』という議論は、とても大胆なように見えるかもしれないが、『文化財となる

かどうかは、大事に使い続けてもらうに値する建物かどうかにかかっている』という議論を経てきた多田先生にとつては、当然の帰結なのだ納得できる。そしてまた、建設業に携わる人間であれば誰も「自分のつくったものが自分の死後も残る」ことにロマンを見出しているのではないだろうか。少なくとも自分の建てたものが二十年后、三十年後に取り壊されるかもしれないということは考えていないし、漠然とではあっても、半ば永続的にそれが存在し続ける姿を思い描いているように思う。

旧善通寺偕行社

と多田先生の『出会いは、三十年近く前に遡る。それまでも当然「良い建物だ」と感じたいしたもの、本気で向かい合い始めたのは27、28歳の頃、建築家真家の上野時生氏

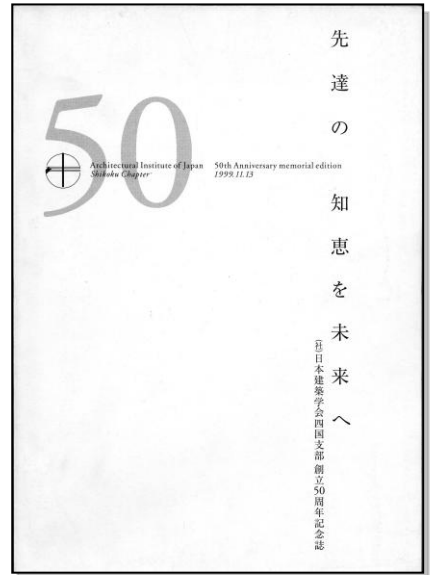
が香川の建築物の写真集を企画し、日本建築学会の一員として調査に入ったことが直接的なきっかけだ。

以来、多田先生は、ことある毎に、「旧師団司令部・偕行社を後世に残すべきだ」「素晴らしい建物だ」と言い続けてきた。善通寺自衛隊の歴代の団長が替わるたびに、「良い建物だから、ぜひ残してください」とお願いをしに行き、それを続けることで、様々な縁が結ばれ、偕行社を中心とするひとつの輪が徐々にできあがっていく。

「創造の意味と手法を四六時中考えているから、何かが目の前に現れたときに、



↑ 多田先生。(撮影:米津光氏)



↓日本建築学会四国支部香川県支部の調査研究書



その言葉通り、借行社に
思いを寄せて以来、二十年
かけて築きあげ、播いてき
た種や育ちつつあった芽
が、このタイミングで一気
に花をつけ、開いていく。

「借行社を保存し残して
いくためには、文化財とい
う形でお墨付きをもらい
たい。だけど、文化庁がそのための調査を
自らするわけではない。じゃあ、どうすれば
いいのか。…『借行社がどうい風に素晴
らしい建物か。』ということを僕たちで調べ、
それを文化庁へ示すことができればいい。」

その方針に基づいて、日本建築学会という
強力な専門家チームにより借行社の調査研
究が始まった。

同時に、借行社をこのままの利用方法(記
念館)として使うのでなく、市民に利用し
てもらえる施設へ進化することの必要性に
ついて議論を重ねる。この『市民に使い
続けられる施設であること』の必要性は、
以前手がけた【劇場 世界館】の保存運動か
ら学んだという。

その思いは、普通寺の市民、そして普通
寺市長と共有されなければならぬ。多田
先生はそれらについて、何度も説明を重ね

『なぜ借行社が記念館的な役割のままでは
いけないか』について、また、『なぜ借
行社という素晴らしい建物を残さねばなら
ないか』についてコンセンサスをとり、つ
いにこれらの基本理念について方向性を一
致させることを実現する。

結果、「もし、この借行社が国の重要文化
財として指定を受けたなら、専門の委員会
を設置して、この借行社を使い続け、後世
に残していくための方策を考えよう。」
という約束を交わすほどの情熱を共にする
に至った。

そして、二〇〇一年六月、借行社は国指
定重要文化財(建造物)となる。約束通り
専門家を及び地元有識者を中心とする【旧
普通寺借行社調査整備委員会】が立ち上げ
られ、重要文化財を利用する上で必要な機
能を確認するための『市民を対象とした利
用実験』や構造・復元・改修、防災・設備
外構、利用計画、郷土資料の各テーマによ
る分科会が組織された。

これらの委員会の成果が、二〇〇四年か
ら始まる耐震改修・整備であり、この度の
『使い続けるために必要な機能としての』
附属棟増築であったのだ。

ちなみに、これらの改修工事に携わった
建設業者に多田先生が要求したのは、突き

その情報がどこに当てはまり、全体の中の
どのような役割を果たすパーツとなるのか
が自然に見えてくる。しかも、二十年間借
行社にこだわり続けたことで、誰もが『借
行社といえば多田』という認識を持つてく
れた。そうならば、借行社に関することは
僕に集まってくる。それは有言実行のひと
つの形といえるかもしれない。

そして、次の縁がめぐってくる。一九九
七年に借行社が登録有形文化財の指定を受
けた後、一九九八年に、日本建築学会四国
支部の支部長に就任したのだ。

翌年の一九九九年は、ちょうど支部の五
十周年の節目の年。記念事業として、各県
の支部へ、【徳島県／環境】【香川県／歴史】
【愛媛県／教育】【高知県／文化】というテ
ーマが提示され、多田先生は香川県の【歴
史】というテーマの具体的な実現として、

【旧陸軍第十一師団の建築施設群の調査研
究】を掲げる。そして、その学術的な調査
だけでなく、そこに『市民からの聞き取り
調査』と『市民向けのパンフレット作成・
配布』という項目を加える。調査研究とい
うことだけを目的にして内部で完結させる
のではなく、市民という外部へ向けて借行
社の価値を発信することを行ったのだ。つ
まり、「借行社を後世に残す」ための布石を
打ったと言えるだろう。

実は、この一九九九年の借行社調査のチ
ヤンスまでに、先生は二十年かけて必要な
信頼関係の構築をしてきたという。「目の前
にチャンスがやってきたときに、初めてそ
れに向けて動いたのでは、何もできない。
その時までに、必要な情報、信頼できる同
志、そして援護射撃、支援を請える相手を
見つけていなければ…。建築は『偶然』に
できるものではないんだから。」



↑竣工式典の南庭園でのアトラクション風景（撮影：米津光 氏）

が起こった」と言って良いだろう。

「……こうして見てみると、正直なところ、多田先生の持つ、長期的なビジョンに驚かされる。建築家というものは、ここまでのものを見通して建物をつくらねばならない責任があるのか、と空惑ろしいような思いさせます。」

「このことについて、多田先生はこう語る。『建築家の仕事は、劇作家であり、演出家でもある。良いもの、使い続けていけるものをつくらうと思えば、建物に関わる全ての段階に目を配り、起こってくる様々な事柄に全て自ら価値判断をし、その責任をとる必要がある。この役割を本気で果たそうと思えば、監修という形でトータルに関わらざるを得ないだろう。』」

「今、多田先生は、「一〇〇年後も使い続けられる建物を。」という信念を、建築主に伝えようとしている。そして、「先生のこれらの夢は？」と尋ねると、「僕がつくる建物の多くを『文化財』にしたいね（笑）」と語る。

それは決して不遜な夢ではない。

「『文化財』になりうる建物というのは、一〇〇年後の価値観から見ても美しく、十分な機能を保ち、快適に利用されつづける

建物のこと。そういった建物を建てるために力を尽くした方が、結果的には必ずローコストだし、建築主のため、そして、そういった建物の集大成が良い街へとつながる。この思いを建築主と共有することが出来れば、一〇〇年間使い続けてもらえる建物になる。一〇〇年後も変わらず愛され、使われていれば、その建物は『文化財』になって当たり前かもしれない。」

「この多田先生の夢は、建設業界の夢でもあるのではないだろうか。（了）」



式典後のシンポジウム「再生へのあゆみ」報告&座談会。今ではコンサートや結婚披露宴などにも利用されている。（撮影：米津光 氏）

◆借行社 年表◆

- 1901年 第十一師団所管財産の土地約1万坪を陸軍省より貸付を受ける。
- 1903年 5月、日本陸軍第十一師団借行社竣工
- 1922年 屋根瓦葺き替え及び内外周漆喰並びにペンキ塗替
- 1945年 12月、米兵、豪州兵のための社交場
- 1947年 5月、一部を普通寺区検察局が採用
- 1949年 この頃借行社の土地を普通寺市が譲り受ける。一部を香川県食糧事務所仲多度支所が採用
- 1950年 自衛隊クラブドリームランドとして利用
- 1954年 市役所としての利用のため金庫を増築、普通寺市役所として利用
- 1969年 普通寺公民館として利用
- 1973年 外周ペンキ塗り替え
- 1980年 6月25日普通寺市立郷土館となる。内外装改修復元
- 1991年 屋根漆喰工事
- 1997年 登録有形文化財指定を受ける
- 2001年 6月、国指定重要文化財（建造物）となる。
- 2004年 借行社の整備が始まる。
- 2008年 旧普通寺借行社、附属棟の工事完成。

◆旧普通寺借行社整備検討委員会

- 委員長：岡田 恒男（東京大学名誉教授）
- 副委員長：鈴木 博之（東京大学名誉教授）
- 多田 善昭（多田善昭建築設計事務所主宰）
- 委員：後藤 治（工学院大学教授）
- 石川 浩（香川短期大学学長）
- 井下 強志（まんでがん代表取締役）

*敬称略

「本気でものを作りをすれば、十年後の品質を問うのは当たり前。そして、どうやれば十年後も美しい作品となれるのかは、職人に聞けばいい。いくら偉そうに言っても、職人という『プロ』に意見を聞けないような設計者では失格。意見を聞き、任せることで、『心配するな、多田先生。必ずつくってやるから。』と損得勘定を超えて向き合ってくれる建設業者が集まってくる。」

「今回の工事についても、これと同じこと

「詰めれば「十年後にはどうなりますか、ということを考えて施工してほしい。」という一点に尽きると言える。」

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。(12) 【七五三】すこやかな成長を祈って

日本には季節の節目だけでなく、人生の節目にもお祝いをするという風習があります。子どもの成長を祝う年中行事として挙げられるのが七五三です。十一月十五日に、七歳(女子)・五歳(男子)・三歳(男女)の子どもを連れてお宮参りを行うというものです。この行事には子どもすこやかな成長を願う、人々の祈りが込められています。

近世に入るまでの日本は、疫病や栄養不足、貧困等による乳幼児の死亡率が高く、成人するまでの生存率は極めて低かったようです。そのため、数えて七歳くらいまでは「あの世とこの世の境に位置する存在」「いつでも神様の元へ帰りうる」魂と考えられ、人別帳にも記載せず、留め置かれていました。その後、七歳になって初めて正式に氏子として、地域コミュニティへ迎え入れられたそうです。余談ですが、この時代の乳幼児の死亡に対して、転生の妨げにならないよう、現世へのしがらみを少なくするために、墓を建てない簡素な水子供養が行われることもあったようです。

このような事情から、縁起が良いとされた奇数(三・五・七)の年に、その年まで

無事に生きてこられたことへの感謝と、これからも幸せに長生きできるように願う儀式が行われたのです。

では、七五三とはどのような儀式が行われていたのでしょうか。現在では、子ども達が晴れ着に身を包み、神社にお参りし千歳飴を買ってもらい、記念撮影をするのが主流ですが、本来は三歳、五歳、七歳にそれぞれ異なる儀式が行われていました。

- 髪置き(三歳)●
それまで剃って短いままだった子どもの髪を伸ばし始める儀式。
- 袴着(五歳)●
初めて袴をつける儀式。
- 帯解(七歳)●
それまで着物を留めるのに使っていた紐を帯に変える儀式。



元々七五三は、十一月十五日と決まっていたわけではなく、収穫を終えてその実りを神に感謝する月である十一月の吉日を選んで行われていました。

日付が今のように決まったのは、江戸時代の中頃。当時の将軍徳川綱吉が、病弱な息子が無事に成長することを願って、袴着

の儀式を執り行ったのが※最吉日であるこの日だったとされています。それが、のちに庶民の間にも広がっていったのです。

最近では、子どもが疲れにくいことや入学式等にも着回せることから、洋服を着てのお参りも目にしますが、一世二代の晴れ姿、昔ながらの和装で記念撮影、というのも思い出に残って良いかもしれませんね。

※十一月十五日は、満月にあたり、更に二十八宿の鬼宿日「鬼が出歩かない日」となるため、最吉日とされた。



◆童謡『とっぴやんせ』と七五三◆

とっぴやんせ とっぴやんせ
 「こはここの細道じゃ
 天神様の細道じゃ
 ちよっと通してくださいんせ
 「用の無いもの通しやせぬ
 「この子の七つのお祝い」
 お札を納めに参ります
 行きはよいよい 帰りは怖い
 怖いながらもとっぴやんせ とっぴやんせ



昔何気なく歌っていた童謡の『とっぴやんせ』ですが、歌詞をよくみてみると「なんだか怖いな。」という印象を受けます。この歌詞の解釈については諸説あるようですが、その一つに、七五三が関係しているものがあります。

七五三の七歳のお祝いに、天神様にお札を納めに行く様子を歌ったというものです。昔は城内に神社があったため、警備が厳しく、少しでも怪しいそぶりをすると、無事には出てこれないかもしれないという恐怖感から「行きはよいよい、帰りは怖い」と歌われたのではないかとされています。

◆人生の通過儀礼／長寿を祝う◆

冒頭でもお話したように、日本には人生の節目を祝う風習があり、中でも長寿を祝う行事(＝賀寿)は数多くあります。数え年の六十一歳のお祝いを還暦ということがよく知られていますが、八十歳のお祝いを傘寿(さんじゅ)、百二十歳以上のお祝いを珍寿(ちんじゅ)という事はあまり知られていないのではないのでしょうか？

他にも年齢ごとに違う名称の賀寿がありますが、それぞれに由来や基調とする色があり、調べてみるととても興味深いものがありました。周囲の方でお祝いをする方がいないか、探してみるのも面白いかもしれませんね。

ちなみに、還暦は「生まれた年の干支に戻る」こと、傘寿は「傘の略字『全』を分解すると八十になる」ことが由来とされています。(文・土岐 倫子)



「花の歳時記 (12) サルスベリ

花の少ない炎暑の候、万象園を訪れた客人を温かく迎えてくれる主人公は、池泉(八景池) 東方に位置する鶴鶴溪のサルスベリであります。

散れば咲き 散れば咲きして

百日紅 (ささすべり) / 千代女

百日紅は盛夏の七月上旬頃から咲き始め、秋風の吹く十月上旬頃までの長期間にまたがって、紅色の愛らしい花を次々と咲かせることから、漢字の百日紅を当てています。

また、和名「サルスベリ」の由来は、樹皮が薄くて剥がれやすく平滑であるため、「木登りの上手なサルでも滑って登れません」

<中津万象園・丸亀美術館へのアクセス>
瀬戸中央道路 坂出北ICより約8.5km/約15分
坂出ICより約14km/約20分
高速道路善通寺ICより約5km 約10分



炎暑のもと、たわおに花団子を付けた鶴鶴形のサルスベリ

【長岡 公 氏】

昭和2年10月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和26年3月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和26年4月以降 香川県公立高等学校教員として
主基高等学校・飯山高等学校・
笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、
高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和63年3月 定年退職 香川西高等学校教頭
現在 公益財団法人中津万象園保勝会 理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」(栗林 玉藻編/中西謙編)がある。

だろう」といった人間様の独断から名付けられました。微笑ましい名称ではありませんか。

サルスベリは中国や東南アジア原産の落葉高木または低木で、日本には江戸時代初期に渡来し、樹形や花が美しく、花の少ない夏にキョウチクトウと共に多くの人の目を惹きつけてくれるので、庭木として広く植栽されました。花色も現在は紅色の他、紫紅色、白色、桃色など多彩な園芸品種が作られています。

サルスベリの花の付き方は円錐花序とあって、枝の先端に直径3〜4cmの花が沢山集って付き、ぼつりとした花団子の様に見えますので、非常に豪華であります。(長岡 公)

「移菊」 (12)



表：紫/裏：黄
着用時期は冬。
冬に近づき、白菊が雪や霜にあって花の周囲から段々と紫色に変化しているところを表わした色目。

古来より季節を感じさせた「色」を知る。かさねの色 (12) 日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。そういったものの結晶とも言える「重色目(かさねいろめ)」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにいかして、平安の風雅を味わってみては…。

【編集後記】 今回の「物語のある建築」の主人公は、建築が大好きな、弊社の3人の社員たち。

建設会社の娘である私ですが、実は建築系の学部を卒業してはいません(法学部出身)。そのことに引け目、申し訳なさを感じた頃もありましたが、ある時、社員のかたより、「技術的なことは、どうせわしらの方が詳しい。真鍋さんに期待しとんは、そんなことちやうで。」と言われ、ハッとしました。

その他、「これをやれ」ってわしらに任せて、やれたら「ようやった」って認めてくれ。そしたら、わしらは付いて行く。「真鍋さんの『素人』目線は、つまり『お客様さまの目線』やと思っ活かさないかん。」等々、社員の皆さまに教えてもらったことは、沢山あります。そんな、頼りにもし、大切にも思う皆さまを絶対に守れるようにならねばと決心しているもの、今私がつもっているのは、「元氣」と「やる気」だけ。いつか一人前の経営者となる日まで、今はとりあえず、「何はなくとも愛情だけは…」と思っています。…といつてもしよつちゅうやかましくケンカしたり甘えたりしてはいますが…。すみません!

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



富士建設株式会社

本社：〒769-1101
三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588(0120-832589)
FAX0875-83-5864
http://www.fujikensetsu.jp
mail y-manabe@fujikensetsu.jp (真鍋有紀子)

建設業許可：香川県知事許可(特18)第189号
／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号
／宅地建物取引業免許：香川県知事登録(10)第1997号

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

- 営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
- 中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭